

渴く

今日は受難日の夕礼拝を神様にお捧げしています。今からおよそ2000年前の今日、イエス様は十字架につけられました。そして、私たちが受けなければならなかった神様の裁きを一身に引き受けて死なれ、私たちの罪の贖いを成し遂げてくださったのです。今年のレントではイエス様のこの十字架の場面を、マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネと福音書が書かれた順番に見てきました。今日はその最後ということで、ヨハネによる福音書19:28～37を聖書箇所に取り上げさせていただきます。そこにはどんなことが記されていて、どんなメッセージが私たちに投げかけられているか、しっかりと見ていきたいと存じます。

さて、詳しく今日のお話を見ていく前に皆さんにお聞きしますが、皆さんは「十字架の七言」というのをご存じでしょうか。今日で4つの福音書すべてに記されているイエス様の十字架の場面をすべて取り上げさせていただきましたが、そこにはイエス様が十字架上で語られた言葉が七つあったはずです。違う福音書が同じ言葉を書き記しているものもありますから、それぞれ違った言葉だけを並べてみると七つになるのです。一つひとつご紹介していきますので、今まで取り上げた十字架の場面を思い起こしながら聞いていただけると幸いです。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」、「はつきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です。見なさい。あなたの母です」、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」、「渴く」、「成し遂げられた」、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」。

これらが教会の歴史において「十字架の七言」、「十字架上の七つの言葉」と呼ばれてきたものに他なりません。イエス様のこれらの言葉は私たちの信仰の歴史において代々心に刻まれ、イエス様のご受難を偲ぶ時にはいつでも思い起こされてきました。

特にレントや受難週において、この「十字架の七言」を繰り返し思い起こし、黙想するのが一つの伝統となったのです。この七つの言葉に集中する黙想の言葉や説教の言葉も数多く残されています。そして、今日のヨハネのお話も、私はこの「十字架の七言」に注目してメッセージを受け取っていきたいと願います。

今日のヨハネの十字架の場面には、「十字架の七言」が二つ出てきます。「渴く」と「成し遂げられた」です。受難日の今日、私たちはこの二つの御言葉をバランスよく受け止めなければなりません。

「成し遂げられた」。この言葉はイエス様の救いの御業の完成を意味する言葉に他なりません。御自分の死によってすべての人の罪の贖いが「成し遂げられた」。主が地上に遣わされて以来、常に追い求めて来られた目的を果たされた。息を引き取る間に、イエス様はそのことをはっきりと宣言なさいました。私たちはこの受難日に、イエス様のこの言葉を深く受け止めて喜びと感謝に溢れます。十字架の御業を通して、私たちの救いが確かに成し遂げられたのだと。しかし、それを心で受け止めるということは、私たちにとって新しい始まりを意味するのだということを私はここで強調しておきたいと願います。

「成し遂げられた」、「すべてが終わった」というイエス様の言葉、それは私たちにとっても為すべきことがすべて終わったという意味では決してありません。むしろ逆です。イエス様のこの御言葉から、私たちの新しい生活が始まっていくのです。イエス様はその尊い犠牲によって、確かな喜びのゴールを備えてくださった。この世界にいかにも罪と悪が吹き荒れようとも、私たちは最後には神の国でイエス様が整えてくださった食卓の宴に与り、神様の御心が成る世界で永遠の命に安らかに憩うのである。その神様の救いの業が、この「成し遂げられた」とイエス様が言われて息を引き取られた瞬間から始まった。始まった以上は、神様は先程私が申し上げたゴール、大団円にきちんと終わらせてくださる。だから、私たちはその神様の救いの御業の中に希望に溢れて巻き込まれていくのです。新しい生活を始めていくのです。

その時に、私たちは今日のもう一つの「十字架の七言」をしっかりと心に留めなければなりません。イエス様は十字架の上で「すべてのことが今や成し遂げられたのを知り」つつも、「渴く」と言われました。喉が渴いていただけではありません。私たちの愛に渴いておられたのです。十字架の上でイエス様をこのような思いにさせた私たち人間の罪をも、私たちはこの受難日にしっかりと心に留めなければなりません。

イエス様のこの「渴く」という言葉を思うにつけ、私はマザー・テレサのある一つの言葉を思い出します。彼女は、自身が創立した「神の愛宣教者会」の会員に当てた遺言の手紙の中で、次のような言葉を語っています。「この手紙で記憶すべき一つのこと、それは『わたしは渴く』です。この言葉は、イエスが『わたしはあなたを愛する』と言われるよりもっと深い言葉なのです。イエスがあなたに渴いておられるということを心の深みで知らないなら、彼があなたにとってどのようなかたなのか、彼にとってあなたがどのような者であってほしいのか、決してわからないでしょう」。

このように語ったマザー・テレサは、その生涯の中でマタイによる福音書 25 : 31～46の御言葉を大切にしたと言います。この御言葉は、イエス様が終末での裁きについて語られたものに他なりません。ここでイエス様は、最後の審判を為さる神様の言葉として、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」という言葉を語っています。困っている人、苦しんでいる人に親切をすれば、神様はそれを御自分にしてくれたこととして受け止めてくださると言うのです。マザー・テレサはこの言葉を大変大事にしまして、目の前の苦しむ人々、死を待つ人々を神様、イエス様と見なして生涯お世話をしました。そして、人々の無関心を愛の反対として戒めたのです。

『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受けらる。とても厳しい裁きの言葉です。イエス・キリストの十字架の贖いを思う時、私たちが受けなければならないこのような罰、このような裁きをも、確かにイエス・キリストは私た

ちに代わってすべて十字架の上で負ってくださったのでしょうか。神様が私たちに示してくださったこの大きな愛によって、私たちは世の終わりには、価無しに、無償で、救いへと招き入れられます。でも、だからと言って、マタイによる福音書25:31～46に記されている、イエス様の終末における裁きについての言葉が、私たちにとってもはや何の意味もなくなってしまうわけでは決してありません。聖書に記されているこれらの言葉を通して、イエス・キリストは今も私たちに愛を行うように、愛の反対である無関心から離れるように呼び掛けておられます。また「神様だから」、「キリストだから」、「何か見返りがあるから」といったように、「～～だから愛する」、「そうでないから愛さない」という条件付きの愛に閉じ籠ってしまうことが、何と神様の御心から離れたものであるかを教えてくれています。そして、御自身が貧しく小さくされた人々の中でその人と痛みを共にし、その人をずっと支え続けながら、私たちが痛むほどの愛を、分け隔てなく、無償で注いでいくよう切に願い求めておられることを告げ知らせているのです。

「渴く」。「わたしは渴く。あなたの愛に飢え渴く」。イエス様のこの御声は、今もこの世界にこだましています。この世の小さくされた人々の中で、これらの人々を支えながら、イエス様は私たちにこの言葉を叫び続けておられます。

くしくも今年の2月に、トルコとシリアの方では大きな地震が発生し、多くの人々が犠牲になりました。何万人もの人々が亡くなられたという知らせにも本当に胸が痛みましたが、私が何よりも人間の罪を感じたのは、このように大勢の人々の命が脅かされている状況にもかかわらず、反体制派の地域など、一部の地域で、当初政府が支援や救助の手をあえて差し伸べなかったというニュースです。こんな時にも、人の命を敵・味方に分けて選別するようなやり方に、私はイエス様が「渴く」と叫んでおられる声が聞こえてくるような思いがしました。

私たちが自らの罪を乗り越えて、イエス様が成し遂げてくださったゴールに向かっていくためにも、私たちはかつて十字架の上で仰られ、今もなお小さくされた人々の

中で私たちに叫び続けておられるイエス様の渇きの御声にしっかりと耳を傾けていかなければならないでしょう。そして、神様の御旨をこの地上で成し遂げていく新しい生活を、悔い改めをもって始めていかなければならないでしょう。神様は私たちを通して、御自分の愛がどこまでも広がっていくことを切に望んでおられます。十字架の上で誰をも分け隔てせず、御自身の方から私達にその無償の愛を示してくださった方。そして希望のゴールを備えてくださった方。と同時に、私たちの愛にこの上なく飢え渇いておられる方。受難日の今日、この方を仰ぎ見ながら、私たちもまた条件を付けることなく、すべての者に無償の愛を注いでいきましょう。そうして、今も渇きの声を挙げておられるイエス様を、溢れるほどの愛で満たしていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——